

ヘッセ兄弟の思い出

ーブルーノ氏とハイナー氏を偲んで

小澤幸夫

今年(2003年)の4月7日ハイナー・ヘッセ氏が亡くなった。昨年「ハイナー・ヘッセ氏との対話」を発表したところ思いがけぬ反響があったので、その後の様子や、また、備忘録の意を込めて、前回書かなかったことを書いておく。

前回書いたことだが、ハイナー氏(1909-2003)は若い頃共産主義に傾倒していた時期があった。これは当時の流行のようなものであったと氏は語っていたが、社会に対する批判的な目は終生変わらなかった。それは自分自身にも向けられていたが、周りの人々には優しくかった。だから皆ハイナー氏が好きだったし、筆者にとってもハイナー氏にお目にかかるのはいつも楽しみであった。



ハイナー氏と筆者 ヘッセ記念館にあるタペストリーの前で

註

- 1) 神奈川大学国際経営研究所『国際経営フォーラム』第13号、pp. 187-193. 参照。

昨年の9月またハイナー氏にお目にかかる機会があった。ガイエンホーフェンで開催されたヘッセ・ターゲに参加する前にロカルノのお宅にお邪魔したのである。前回に比べ外見はそれほど変わっていなかったが、大分疲れた様子で体の不調を訴えていた。

筆者はその日、その夏読んだ『ガラス玉遊技』の印象を、当日見たマッジョーレ湖に朝日が映る様子と重ね合わせて、次のようなような俳句を詠んだ（厳密に言えば季語がないので俳句ではなく、5, 7, 5の短詞であるが）。

Auf Wellen klingen
Zweier Herzen zusammen
Bei Sonnenaufgang

二つの心が
波の上に共鳴する
日の出の時

ハイナー氏はちょっとロマンティックすぎないかねと言って、ちょっとシニカルでそれでいてやさしい微笑を浮かべた。ハイナー氏の側にいるとなぜか父と一緒にいるような懐かしい気分になる。これといって取り留めのない話をしていると、ハイナー氏が「申し訳ないが疲れたので少し休みたい。そろそろ引き取ってもらえないか」とおっしゃった。気がついたらもう1時間も経っていた。これがお目にかかる最後の機会になるかもしれないと思い、少しでも長く一緒にいたいと思ったのが悪かった。ハイナー氏はさぞかしお疲れになったことだろう。大変申し訳ないことをしたと反省している。

11月にハイナー氏から葉書をいただいた。それには次のようにあった。

Auf Wellen finden
Zweier Herzen zueinander
Bei Sonnenaufgang

二つの心が
波の上にお互いを見出す
日の出の時

貴方の簡潔なハイクは年老いた病人に喜びを与えてくれました。「波」は「山の湖」より良いと私も思います。

心よりの挨拶を込めて
貴方のハイナー・ヘッセ

訪問した時ハイナー氏に何か欲しいものはないかと尋ねたところ、日本の神様に私のことを祈ってほしいと言われた。そこで、箱根神社の御守りを送ったところ、「検査のためこれから入院するので一緒に持っていく」という返事をいただいた。クリスマス前には退院でき、特に悪いところはなかったそうだが、体調は良くないようだった。

翌年3月1日の誕生日にカードを送ったところ次のような返事が来た。

貴方の丁寧なお祝いの言葉は私を喜ばせました。だが一方では、この年ではもう強い感情を抱かなくなったと申し上げなければなりません。

ごきげんよう！
ハイナー・ヘッセ

「ごきげんよう！」の原文は“Leben Sie wohl!”で、しばらくは会う機会がない長い別れの時に用いる。ハイナー氏はひょっとして死期が近いのを予感していたのかもしれない。

今年のヘッセ・ターゲではハイナー氏の姪のクリスティーナさんに会えた。その時聞いた話だが、ハイナー氏は亡くなる直前モンタニョーラのヘッセ記念館館

長レギーナ・ブッハー氏を呼び「レギーナ、私は死ぬよ」と言ったそうである。その言葉通りハイナー氏は2日後に亡くなった。自分の死期が分かっていたのであろう。

これもクリスティーナさんに聞いた話だが、8月の終わりの日曜日にハイナー氏を偲ぶ会が催され、ハイナー氏がこよなく愛したグロットに集まり皆でリゾットを食べたそうである。グロットとは本来洞窟という意味で、もとは岩窟に穴を掘り冷蔵庫代わりに貯蔵庫を造り、そこにサラミやチーズ、ワインなどを保存したのだが、いつの頃からか、その貯蔵庫にレストランが併設され、そこで郷土料理が出されるようになった。スイスのティチーノ地方独特の田舎風の素朴なレストランである。

筆者もハイナー氏に初めてお目にかかった時グロットでリゾットをご馳走になった。緊張していたので味はよく覚えていないが、ハイナー氏の優しい笑顔は今でもよく覚えている。その時はまた、ヘッセが買ったタペストリーの話の伺い、それを映画に撮ったものを別居していた奥さんのお宅まで行って見せていただいた。その後でハイナー氏は当時大学院生だった筆者のために安ホテルを探して下さり、自ら車で送って下さった。宿の主人に「あの人がヘッセの息子さんですよ」と言ったら驚いていた。

閑話休題。ハイナー氏の希望で葬儀は行われず、墓も建てられなかった。遺体は遺言により大学病院に献体されたので、遺骨さえない。残ったものはただ皆の中にある思い出だけである。ハイナー氏らしい徹底ぶりが窺える話である。「偲ぶ会」には、ヘッセの書簡集をハイナー氏とともに編集し、ハイナー氏が全幅の信頼を寄せているミヒェルス氏も家族全員でフランクフルトから車で駆けつけたが、途中でプレーキが故障し、ローギアでアルプスを越え辿り着いたということであった。そして翌日クリスティーナさんが止めるのも聞かずまたその車でフランクフルトまで帰ったという話である。無事着いたのもハイナー氏の遺徳のおかげであろうか。

クリスティーナさんの父親ブルーノ氏（1905-1999）にお目にかかったのは、カルプで開かれた国際ヘッセ・コロキウムで簡単に挨拶を交わしたのを除けば、一度だけである。1983年7月18日のことであった。オシュヴァントの近くシュ

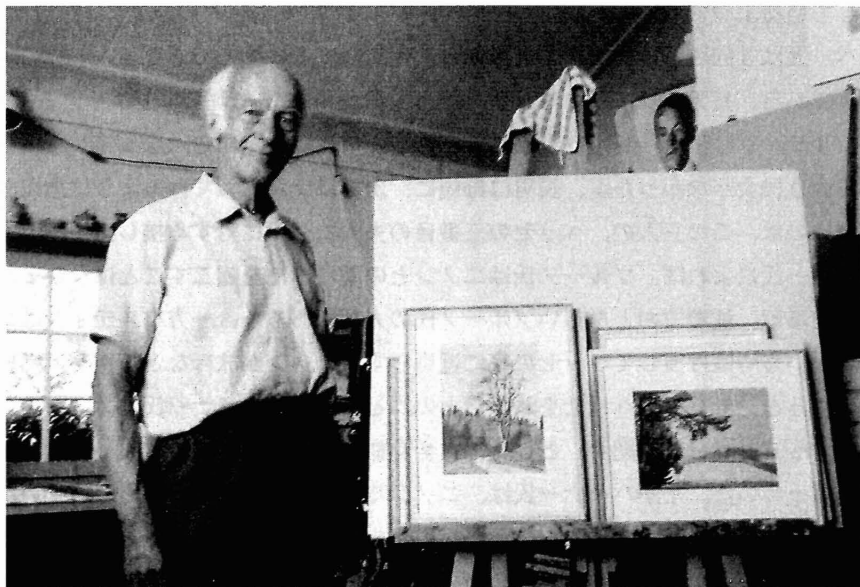
ピューヒにお住まいだったが、駅まで車で迎えに来て下さった。ブルーノ氏は二番目の夫人と暮らしていたが、お宅は牛がのんびりと草を食む様子が見えるのどかな田園地帯の真ん中にあった。ブルーノ氏は幼い頃、ヘッセの友人の画家クーノ・アミエットのもとにあずけられ、その影響を受け自らも画家になった。ヘッセの絵とブルーノ氏の絵を何点か見せていただいたが、ヘッセほど強烈な個性は感じられず、その代わりもっと穏やかで端正な画風であった。それは氏の性格を表しているようでもあった。

ヘッセは3回結婚したが子供は最初の夫人マリアとの間にできた3人の男の子だけである。長男のブルーノは画家、次男ハイナーはインテリア・デザイナー、三男マルティンは母と同じく写真家になった。三男は1968年に亡くなってしまったので会う機会がなかったが、長男は母親に、次男は父親に似ているように思えた。面白いのは、この三人の、ヘッセの三番目の夫人ニノンに対する接し方である。ハイナー氏によれば、ブルーノ氏はニノンとの間に摩擦を起こすことはなかったそうである。従順でおとなしいブルーノ氏の人柄であろう。一方マルティンはニノンがいる時はけっしてヘッセの家に近寄らず、ニノンが旅行などで出かけているところを見計らってヘッセを訪ねたとのことである。ハイナー氏はニノンのことを“Assistentin”（助手）としては大変有能だが、母親としては親しめなかったと言っていた。だがハイナー氏は、ニノンには悪いことをしたとも語っていた。どういふことが詳しくは尋ねなかったが、年をとってニノンの気持ちも汲むことができるようになったのであろう。

ハイナー氏はブルーノ氏の勧めでヘッセの原稿を管理するようになり、書簡集の編集にも携わるようになったのであるが、興味深いのは、ブルーノ氏がヘッセのことを“Vater”（父）と呼んでいたのに対し、ハイナー氏が「ヘッセ」と他人のように呼んでいたことである。もっともこれは1983年のことで2002年に話した時は“Vater”と言っていた。編集者としての仕事から解放されて、本来の父ヘルマンに戻ったのであろう。

ブルーノ氏の話に戻ろう。アトリエで絵を見せてもらった後で、近くの池まで行って、ボートに乗せて下さった。水面の上をゆったりした時間が流れていった。その後毎年のようにお手製のクリスマスカードや版画をいただいたが、そのう

ち返事が来なくなった。年のせいでお疲れだったのだろう。2000年にモンタニョーラのヘッセ記念館を訪ねた時にはちょうど、前年亡くなったブルーノ氏の回顧展が催されていた。そこに見たのはいつもと変わらぬ優しく実直なブルーノ氏の姿そのものだった。



ブルーノ氏 自宅にて